

がん患者の遺族に有効な悲嘆緩和療法の開発



薬学部 薬学教育推進センター 教授
浅井 真理子 ASAI, Mariko



心理

URL : <https://www3.med.teikyoku-u.ac.jp/profile/ja.6c38664b5a0dc436.html>

板橋キャンパス

キーワード：サイコオンコロジー(精神腫瘍学)、遺族ケア、デジタル支援

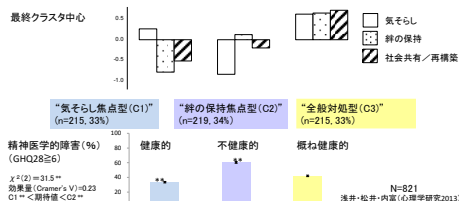
SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

研究の概要

日本の死亡者は今後増加をたどり 2040 年にはピークの死者 170 万人の多死社会を迎えると言われる。この死亡者の約 4 分の一はがんによる死亡であり、毎年 100 万人以上の遺族が新たに悲嘆を抱えることになる。また、これらの遺族の約 1 割は悲嘆が重症化しうつ病や遷延性悲嘆症といった精神科診断に相当するが、現時点では海外含めて標準治療はなく有効な悲嘆緩和療法の開発と普及が望まれている (1)。このような中、我々は国立がん研究センターを中心としたサイコオンコロジー (精神腫瘍学) 研究者チームとして日本のがん患者の遺族の実態調査を実施し (2)、「故人との絆の保持に偏らずに対処柔軟性の獲得が悲嘆軽減に寄与する」という仮説を得た (3)。またこの仮説に基づき、さらにはがん患者会らの協力を得て、行動活性化を用いた対面型プログラムを開発した。その結果、この遺族ケアプログラムが実施可能かつ抑うつ軽減に有効であることを報告した (4)。

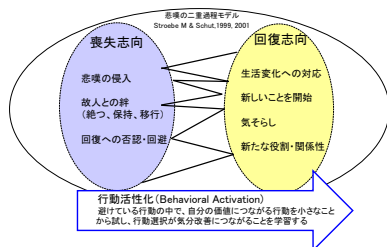
遺族を対象とした実態調査による介入仮説の探索⁽³⁾

対象：がんで配偶者を亡くした遺族(死別後半年～7年、患者は国立がんセンター東病院で死亡)821名
方法：(1)非階層的クラスター分析による対処行動パターンの分類 (2)二重検定による健康度比較



不健康的な「絆の保持焦点型」を「全般対処型」へ、という介入仮説を得た

行動活性化を用いた遺族ケアプログラムの開発⁽⁴⁾



二重過程を柔軟に行き来できると、報酬知覚が増大し抑うつが軽減する

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

がん患者の遺族を対象とした心理支援は医療でも地域でも十分とは言えない状況であり、支援が必要な遺族に十分に届かないという課題が残されていた。このような中で近年のデジタルを駆使した遺族支援は空間と時間の壁を越えて遺族に届けることができる有用な方法であり、医療にも応用できる可能性を持つと考えている。

知的財産・論文・学会発表など

1. Akechi T, Kubota Y, Ohtake Y, et al. Clinical practice guidelines for the care of psychologically distressed bereaved families who have lost members to physical illness including cancer. Japanese Journal of Clinical Oncology. 2022; 52 (6): 642-5.
2. Asai M, Akizuki N, Fujimori M, et al. Psychological states and coping strategies after bereavement among spouses of cancer patients: a quantitative study in Japan. Supportive Care in Cancer. 2012; 20 (12): 3189-203.
3. Asai M, Matsui Y, Uchitomi Y. Patterns of coping strategies after bereavement among spouses of cancer patients. Shinrigaku Kenkyu. 2013; 84 (5): 498-507.
4. Asai M, Ogawa Y, Hirayama T, et al. Behavioral activation program for reducing depressive symptoms among the bereaved of cancer patients: A feasibility and preliminary effectiveness study in Japan. Palliative & Supportive Care. 2024;1-9.

精神分析的人間理解の研究



文学部 心理学科 学科長・教授

池田 政俊

IKEDA, Masatoshi



URL : <https://www3.med.teikyo-u.ac.jp/profile/ja.2550836795d938e9.html>

心理

八王子キャンパス

キーワード：精神分析、臨床精神医学、メンタルヘルス

研究の概要

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 8：働きがいも経済成長も

精神分析の実践を重ねながら、日々、人々のこころの健康、生きがいなどについて思索しています。それは以下のようなことです。

例えば・人は誰でもいつかは死ぬ。ということは、合理的に考えると生きていることに意味はないのではないか？こうした命（や無償の愛など）の「限界」を知りながら、（あるいは、知っているからこそ？）、豊かに生きるとはどのようなことなのだろうか。処世術的なスキルを磨き、その場その時に、より「適応」して行くことなのだろうか。あるいは、磨いたスキルで適応しようとしている自分や、そうしないと適応できない自分と徹底的に向き合おうとすることなのだろうか？

より「上へ」「前へ」と、幻想かもしれないファルスを追い求め続ける（そして死ぬ）ことより、一見非合理的で無駄に見える営みの中にこそ、真なるものがある可能性はないのか。

それは「家族との日常生活」「長い下積みの修行」「自然」「普通」などなのか。

しかしそこには常に二面性、いや多面性がある。“相反するものの同時存在の中にこそ、私たちの偉大なる＜普通性＞があるのではないか。”（村上春樹）

依存、分離、競争にまつわる葛藤を、治療関係に集約して再演し、それを転移として体験し解釈することを通して、患者が自己理解を深める。それは何のためなのか？

微視的にも巨視的にも「無駄」にも感じられる多くの時間は、ウチとソトの区別、必ず訪れる「老」「死」、などという問題とどう関係するのか。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

私の行っていることは、おそらく直接には社員のメンタルヘルスにも、動機付け向上にも役立ちません。しかし、仕事をする、さまざまな要因で仕事ができなくなること、復職すること、ワークライフバランスをとること、年を取っていくこと、一見無駄に見える作業をすること、自分の行っていることに意味を見出すこと、あるいは見出し得ないこと、そして究極には生きていくこと、などについて、それぞれの人の個性の高い心の歴史の中での意味を深く考えていくことには役立つだろうと思います。深い意味でのメンタルヘルスに寄与するところは大きいと考えます。

知的財産・論文・学会発表など

- ・2024 ヒステリー再考帝京大学学生カウンセリング研究 11 号
- ・2023 儒教思想、仏教思想と多様性－精神分析的な観点から－帝京大学学生カウンセリング研究 10 号
- ・2022 精神分析における対話 精神科治療学 37 (10)
- ・2022 見るなの禁止－「逃避」から「克服（志向）」そして「共存」へ 精神分析研究 66 (3)

社交不安における注意プロセスに関する研究



文学部 心理学科 講師

石川 健太

ISHIKAWA, Kenta

URL : <https://www.teikyo-u.ac.jp/shinri/staff.html>



心理

八王子キャンパス

キーワード：社会的認知、注意プロセス、解釈バイアス

研究の概要

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

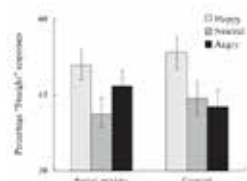
社交不安における注意プロセスに着目した研究を行っている。社交不安をもつ人は他者からの評価に対する恐れや不安を抱き、社会的な状況を回避するという傾向をもつ。

顔写真をもちいた表情と視線に関する研究

社交不安傾向がある人が他者の視線方向をどのように解釈するかを検討した。

社交不安が高い人は真顔と比べて怒った顔に対して自分の方に視線が向けられていると判断する傾向が高かった。

社交不安が高い人は、他者の怒りが自分に向けていなくてもそれが自分に向けられているという解釈バイアスをもつことを示唆。



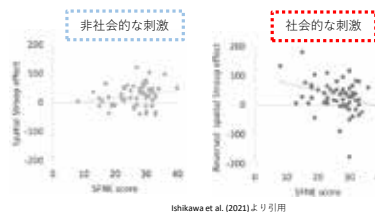
石川・岡村・大久保(2012)より引用

社会的刺激と非社会的な刺激の注意制御に関する研究

社会的な刺激（視線）と非社会的な刺激（矢印など）に対する注意プロセスを検討している。

社交不安が高い人は社会的な刺激に対する注意プロセスが困難になることが示唆された。

他者からの評価や注目に関わる情報を適切に処理できないことが社交不安の維持要因になる可能性を示唆した。



Ishikawa et al. (2021)より引用

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

必要な情報に注意を向けたり、不必要な情報を抑制するといった注意プロセスは私たちの生活と密接に関わっています。社交不安症以外にも、自閉症スペクトラム症や注意欠如・多動症（ADHD）といった神経発達症における症状の背景に注意プロセスの問題が生じていると考えられています。

精神疾患や神経発達症における注意プロセスの特徴を検討していくことは症状の維持要因や新たな介入方法の検討に役立てることができます。今後は社会的な認知に関わる注意プロセスについて、精神疾患だけでなく文化や人種など様々な要因から検討していくことで、私たちがもつ共通の認知機能を明らかにしていきます。

知的財産・論文・学会発表など

- Ishikawa, K., Oyama, T., Tanaka, Y., & Okubo, M. (2024). Perceiving social gaze produces the reversed congruency effect. *Quarterly journal of experimental psychology*
- Ishikawa, K. K., Oyama, T., & Okubo, M. (2021). The malfunction of domain-specific attentional process in social anxiety: Attentional process of social and non-social stimuli. *Cognition & Emotion*, 35 (6), 1163–1174.
- Ishikawa, K., Suzuki, H., & Okubo, M. (2018). Effects of social anxiety on metaphorical associations between emotional valence and clothing brightness. *Journal of behavior therapy and experimental psychiatry*, 61, 32–37.
- 石川健太・岡村陽子・大久保衛垂 (2012). 社会不安傾向者の視線方向判断—表情と解釈バイアス— 心理学研究, 83, 225–231.

環境と身体と心の相互作用



文学部 心理学科 教授
大江 朋子 OE, Tomoko

URL : <https://researchmap.jp/tomoko.oe>



心理

八王子キャンパス

キーワード：心理、身体、環境、社会的認知、ヴァーチャルリアリティ

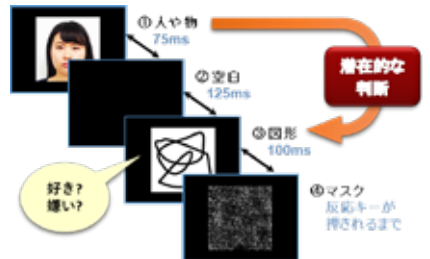
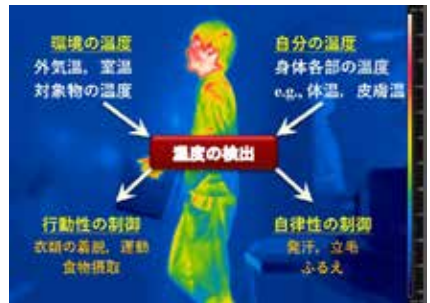
研究の概要

人の心の活動は、多かれ少なかれ、その場の環境と身体を用いて行われている。自分や他者の姿勢、視線、表情、声、匂い、心拍数や血流量など、その時々で身体で処理される情報の助けを受けて、人は自分や他者ととらえることができ、さらには、その場の状況に応じた柔軟な判断や行動を生み出している。

このような情報処理のなかでは、本人ですら自覚できない心の過程が作用し、人や物に対する判断や行動（好ましさ、偏見、差別、攻撃、援助、購買行動など）を方向づけている。そこで生じる潜在的な過程を、心理学で開発された実験や調査の手法を用いてとらえている。

近年は、サーモグラフィー、ヴァーチャルリアリティ、生理反応計測機材を用いて、温度が対人的な判断や行動に与える影響を研究している。温度は、身体的にも社会的にもヒトの生存に重要な情報であることから、認知や行動を方向づける力をもつと考えている。

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を
SDGs 目標 10：人や国の不平等をなくそう



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

環境と身体に潜む様々な要因が人間の判断や行動にどのように影響するかについて、理論とエビデンスをもとに実験や調査を実施し、データを分析の結果から考察を行うことができる。

利用する手法は、(a) 環境制御された実験室での実験の実施、(b) オンラインや質問紙を用いての調査の実施、(c) 深部温、皮膚表面温、心拍、唾液中ホルモンレベル（コルチゾール、テストステロン、オキシトシン）の非侵襲的な計測、(d) 課題での正誤反応や反応時間を利用した潜在的な態度や認知の測定、(e) 人物を含む様々な対象への印象評定、(f) 量的なデータの統計的な分析、(g) 文章や単語などのテキストの分析などである。

知的財産・論文・学会発表など

- ・大江朋子 2021 温度×顔印象 Humanities Center Booklet (Vol.7) 顔の実験心理学 (2)－顔では決まらない顔の印象 22-39.
- ・Oe, T., Takata, T., Ogawa, M., & Kotoku, J. 2021 Behavioral and cognitive responses in a cold and a warm environment: Encountering others on the street in a virtual reality experiment. Oral presentation at the 14th Biennial Conference of AASP.
- ・西口雄基・萩原健斗・大江朋子 2022 決定論的信念による死連想傾向の促進：若年層の死に関する思考の高まりの早期発見に向けて グローバルビジネスジャーナル
- ・中井彩香・大江朋子・泉明宏・沼崎誠 2024 名前の好みと既存の自尊心尺度との関連 心理学研究

心理

摂食障害の家族心理教育プログラムの開発



文学部 心理学科 准教授

小原 千郷

OHARA, Chisato

URL : https://researchmap.jp/chisato_ohara



心理

八王子キャンパス

キーワード：臨床心理学、摂食障害、家族、心理教育

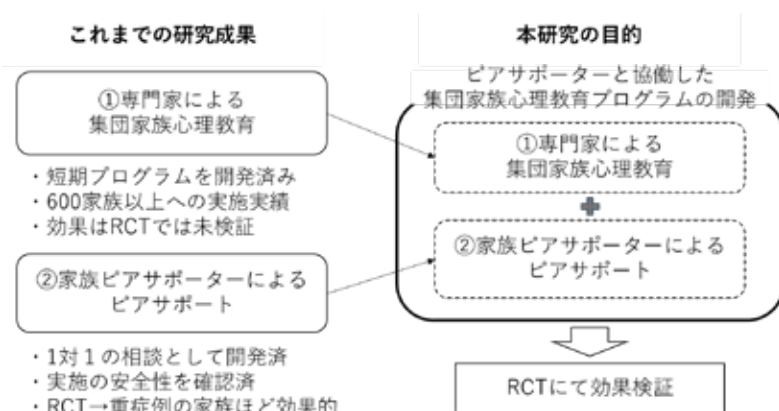
SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標 17：パートナーシップで目標を達成しよう

研究の概要

研究の目的は、摂食障害の家族支援として、家族ピアサポーターと協働した集団心理教育を開発し、その効果を検証し、社会に実装することである。

ピアサポーターと協働した集団家族心理教育プログラムを開発し、効果検証を行う。具体的には、プログラム参加群と待機群による無作為統制試験（Randomized controlled trial, 以下 RCT）を実施し、プログラムの効果を検証する。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

摂食障害は、若年の女性を中心に発症が多く、精神疾患の中でも顕著に死亡率が高い疾患である。家族のケアの負担は高く、それを軽減する必要性に加え、家族が適切に患者をサポートすることで患者の回復につながることが知られている。しかし、日本において有効性が証明された支援プログラムがないことが、家族支援の普及の障壁となっている。

本研究により家族支援が患者の回復に効果的であることが検証できれば、成果の専門家への提供、医療政策への反映など、社会実装に貢献できる。

知的財産・論文・学会発表など

- ・鈴木 眞理, 西園マーハ文, 小原 千郷：摂食障害：見る読むクリニック DVD とテキストで学ぶ. 星和書店, 2014
- ・Ohara, C et al. Individualized peer support needs assessment for families with eating disorders. Biopsychosocial Medicine, 17 (1), 11. 2023

推察に関する実験的分析



文学部 心理学科 教授

草山 太一

KUSAYAMA, Taichi



心理

URL : <https://researchmap.jp/taichikusayama>

八王子キャンパス

キーワード：心の理解、共感、協力、モチベーション・ビデオ、メンタライジング

SDGs 目標 10：人や国の不平等をなくそう

SDGs 目標 16：平和と公正をすべての人に

研究の概要

他者の心的状態を読み取る「心」の仕組みに関連した以下の検討を行なっています。

- 1) ヒト以外の動物の協力性：げっ歯類（ラット）や鳥類（ハト）を対象に、「個体同士が同一の目的を果たすために協力することができるか？」また「他個体の心的状態を認識し、援助できるか」という問いについて、オリジナルの装置を用いて検討しています。他者の協力が欠かせない状況において、ラットは仲間と協力できることが分かっています。
- 2) 集団内での動物の個体間距離を計測し、心的距離との相関について分析しています。
- 3) モチベーション・ビデオの有効性：動画刺激を視聴することによって、特定の行動の動機づけを高めることができるか、生起の有無や効果的に高めることができる要因について検討しています。
- 4) 非生物に対するメンタライジング：非生物（人工物）に“こころ”があるように見るためにはどのようなデザインが必要か、対象に心を認めるための要因について調べています。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

ヒト、ヒト以外の動物、人工物（モノ）を対象とすることで、心に関する統合的な理解を目指しています。動物の協力行動を調べることは、私たちヒトの協力の在り方を考えることにつながります。モチベーション・ビデオについては、特定の個人やチームに向けるのではなく、出来るだけ多くの人が利用できるようにビデオの内容を一般化することで、世の中を元気にする一助となりえます。また“こころ”があるように見えるデザインの検討は、既存の製品に付与することで、その製品に対する愛着度が増し、結果的にモノを大事に扱う意識を高めることにつながるが考えられます。また、今後に普及するであろう様々なロボットに親しみを持たせるような外観デザインにも貢献できます。

知的財産・論文・学会発表など

- ・草山太一・協田真清 (2024). ジュズカケバト (*Streptopelia risoria*) は交代で抱卵する. 動物心理学研究, 74, 11-16.
- ・草山太一・安部良・岡ノ谷一夫 (2023). 多型原理から幸福を考える. 帝京大学心理学紀要, 27, 1-6.
- ・草山太一・市川万由奈・余洋 (2020). ラットにおける餌と仲間の二者択一課題. 帝京大学心理学紀要, 24, 13-23.
- ・草山太一 (2020). ハトとラットにおける協力課題の報酬分配. 帝京大学心理学紀要, 24, 1-11.

認知能力と非認知能力の遺伝と環境



文学部 心理学科 教授

敷島 千鶴

SHIKISHIMA, Chizuru



心理

URL : <https://researchmap.jp/shikishima>

八王子キャンパス

キーワード：パーソナリティ、知能、学力、行動遺伝学、双生児法

SDGs 目標 4：質の高い教育をみんなに
SDGs 目標 10：人や国の不平等をなくそう

研究の概要

認知能力と非認知能力の個人差に寄与する要因を、科学的視点から明らかにすることにより、社会化に果たす家族の役割と、子どもの機会不平等が発生するメカニズムの解明を試みている。

依拠するアプローチは、ふたごととその両親を対象とした、行動遺伝学の方法論に基づく双生児研究、そして全国から無作為抽出された成人及びその配偶者と学齢期の子どもの対象とした、家族パネル調査研究である。

現在は、2003～2010年に生まれたふたごのきょうだいと両親を対象とした『学力と生きる力のふたご家族調査』を隔年で実施し、双生児親子のパネルデータを収集している。学齢期の子どもたちが、基礎的な学力（認知能力）と社会的なスキル（非認知能力）を、どのように形成し、それをどのように社会的成果として結実させていくのか、その機序を遺伝要因と環境要因から明らかにしている。

2018年の第1回調査で小学3年生から中学2年生であったふたごの子どもたちは、2024年の第4回調査では中学3年生から20歳へと成長し、長期的縦断研究の成果が明らかにされつつある。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

小学1年生から中学3年生まで学力を1次元で測定することのできる、項目反応理論に基づき等化されたオリジナル学力テストを開発した（山口・敷島・星野・繁樹・赤林, 2019）。テスト項目とパラメタ推定値を提供することにより、教育現場における利用が可能である。また、15歳以上を対象とし、論理的推論能力を測定する課題100問（Shikishima, et al., 2009）と、その簡易版5問（Shikishima et al., 2011）の開発もっており、英語圏での利用も多く、認知能力の指標として幅広く活用されている。

知的財産・論文・学会発表など

- ・中村聖・敷島千鶴・安藤寿康（2024）. 認知能力と教育達成の関連に対する遺伝要因と環境要因の影響—行動遺伝学のアプローチを用いて— 教育社会学研究, 114, 139-158.
- ・敷島千鶴・平石界（編）（2021）. 『ふたご研究シリーズ第1巻 認知能力と学習』創元社
- ・Shikishima, C., Hiraishi, K., Takahashi, Y., Yamagata, S., Yamaguchi, S., & Ando, J. (2018). Genetic and environmental etiology of stability and changes in self-esteem linked to personality: A Japanese twin study. *Personality and Individual Differences*, 121, 140-146.
- ・赤林英夫, 直井道生, 敷島千鶴（編）（2016）. 『学力・心理・家庭環境の経済分析—全国小中学生の追跡調査から見えてきたもの』有斐閣
- ・Shikishima, C., Hiraishi, K., Yamagata, S., Ando, J. & Okada, M. (2015). Genetic factors of individual differences in decision making in economic behavior: A Japanese twin study using the Allais problem. *Frontiers in Psychology*, 6, 1712.
- ・Shikishima, C., Hiraishi, K., Yamagata, S., Neiderhiser, J. M. & Ando, J. (2013). Culture moderates the genetic and environmental etiologies of parenting: A cultural behavior genetic approach. *Social Psychological and Personality Science*, 4, 434-444.
- ・Shikishima, C., Yamagata, S., Hiraishi, K., Sugimoto, Y., et al. (2011). A simple syllogism-solving test: Empirical findings and implications for g research. *Intelligence*, 39, 89-99.
- ・Shikishima, C., Hiraishi, K., Yamagata, S., Sugimoto, Y., et al. (2009). Is g an entity? A Japanese twin study using syllogisms and intelligence tests. *Intelligence*, 37, 256-267.

思春期の精神的健康に関する研究



文学部 心理学科 准教授

田中 麻未

TANAKA, Mami

URL : https://researchmap.jp/tanaka_mm



心理

八王子キャンパス

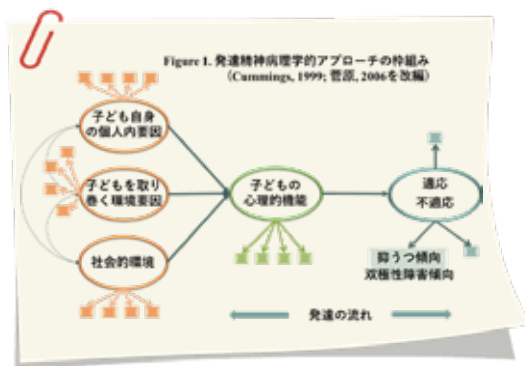
キーワード：抑うつ傾向、双極性障害傾向、精神的健康、思春期

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

研究の概要

児童期から思春期にかけての子どもたちは、他の発達段階の中でも特にさまざまな変化を伴う時期であり、心身の成熟を迎える中で問題を抱える子どもも少なくない。また、思春期における精神的健康の問題は、成人期以降の再発率の高さや問題の持続といった長期的な影響が指摘されている。とりわけ、思春期のうつ病は、家族や友人関係の問題に起因する社会的孤立や学業の問題、自殺企図のリスクといった深刻な問題に加え、成人期以降における社会的・経済的な問題、身体的健康への影響などの長期的な影響も懸念されている。さらに、単極性のうつ病から双極性障害に移行するケースも少なくなく、近年では、成人期の双極性障害の初発年齢が10代である症例も多いことから、子どもの双極性障害も注目されるようになってきた。

本研究では、発達精神病理学のアプローチを援用し（Figure 1）、思春期における心と身体の発達過程において、子ども自身の個人内要因（心理的要因・遺伝的要因）、環境要因（家庭内外での人間関係・ライフイベント等）、社会的環境（経済・地域等）、そして心理的機能（認知・社会性等）が、抑うつ傾向及び双極性障害傾向とどのように関連しているのか、そのメカニズムを明らかにするため、縦断研究や双生児法による行動遺伝学的研究を行っている。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

思春期における抑うつ傾向や双極性障害傾向に関連する心理学的要因を検討することは、一次予防の観点からも重要である。また、これらの発生メカニズムを解明することにより、早期介入や予防策の開発に資する基礎的資料を提供することが期待される。実践的なアプローチを伴う知見の蓄積を通じて、思春期における精神的健康の維持と向上に寄与することを目指している。

知的財産・論文・学会発表など

- 田中麻未・高橋雄介・菅原ますみ. 思春期に経験するストレスフルなライフイベントの統制可能性は抑うつ症状と異なる遺伝・環境相関を示す. 日本心理学会第88回大会, 9, 6-8, 2024.
- 田中麻未・高橋雄介. 思春期における親からの自律性支援と双極性障害傾向の関連に関するセルフ・コントロールの媒介効果. 日本心理学会第87回大会, 9, 15-17, 2023.
- Tanaka, M., & Hashimoto, K. (2019). Impact of consuming green and yellow vegetables on the depressive symptoms of junior and senior high school students in Japan. *PLoS One*, 14 (2), e0211323.
- Tanaka, M., Takahashi, Y., & Sugawara, M. Differences in pubertal status in genetic and environmental influences on social support and depression among Japanese adolescents. 49th Annual Behavior Genetics Meeting, June 26-29, 2019, Stockholm (Sweden). (Behavior Genetics. 2019; 49: 676.)

心理

犯罪心理学における投映法の活用



文学部 心理学科 教授

外川 江美

TOGAWA, Emi

URL : <https://researchmap.jp/ETogawa>



心理

八王子キャンパス

キーワード：犯罪心理学、投映法、矯正教育

研究の概要

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を
SDGs 目標 16：平和と公正をすべての人に



TAT:主題統覚検査
(イメージ)

矯正教育

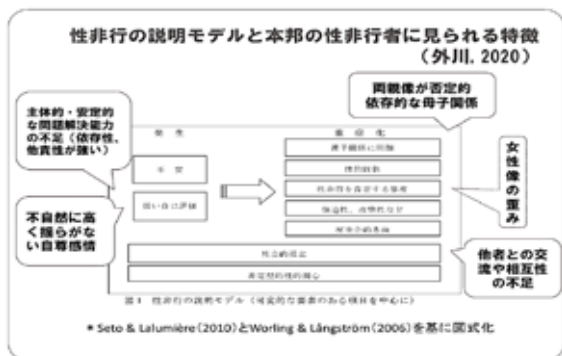
少年院や刑事施設で実施される矯正教育と動機づけ面接について、他領域にも分かりやすく技術や要点を伝えている。

性非行

日本の性非行者について、欧米の説明モデルと対比しながら、性非行の発生と重症化のメカニズムを明らかにし処遇プランを策定している。

投映法

犯罪心理の解明において投映法は有用性が高く、中でも TAT（主題統覚検査）は犯罪（非行）者の在り様を生き生きと映し出す点に特徴がある。TAT を中心に投映法の活用可能性を探究するとともに、心理臨床家や学生への教育を通じて投映法の普及に努めている。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

犯罪心理学は国や地方自治体が担う刑事政策に研究知見を提供する、実務と連動した学問である。ひとたび犯罪が発生すれば、加害者に対する一連の刑事司法手続きにコストが生じ、また、被害者やその家族に及ぶダメージは計り知れず、中でも性犯罪は魂の殺人と言われるように被害の影響は特に深刻で、医療や福祉のサポートを要する状態になることも少なくない。様々な次元で多大な損失をもたらす犯罪（加害・被害）をなくし、安心安全に暮らせる社会の実現が目指される。

知的財産・論文・学会発表など

- ・2024 「臨床心理検査の現在 TAT ①～③」 Clinical Psychology laboratory, No.17 ～ 19
- ・2020 「主題統覚検査 (TAT) による性非行の研究」 東北大学大学院 (博士論文)
- ・2017 Approach to juvenile sex offenders using the TAT. 22th International Congress of Rorschach and Projective Methods.
- ・2017 「矯正施設における動機づけ面接法」『臨床心理学』誠信書房
- ・2016 「5. 査定 TAT」『犯罪心理学事典』丸善出版
- ・2007 「性犯罪者の処遇プログラム (1) - 矯正施設での実践 -」『犯罪心理臨床』金剛出版

子どものこだわり／強迫への早期支援の可能性



文学部 心理学科 講師

野中 舞子

NONAKA, Maiko

URL : <https://researchmap.jp/m-nonaka>



心理

八王子キャンパス

キーワード：強迫性、衝動性、発達、子ども支援

研究の概要

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

強迫やこだわりへの支援？

こだわりは正常な発達過程で誰もが経験する
⇒生活に支障が出る場合、専門家による支援が必要
⇒悪化してから専門的な支援につながることも。

※オンラインでの支援が有効であれば
多くの子育て世代に援助を届けられる。

目的：オンライン心理支援の有効性の検討

3-8歳の子どもを持つ親子を対象に、有効だといわれる心理支援を組み合わせたプログラムを作成。

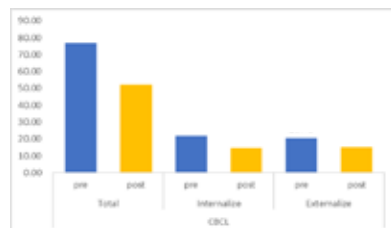
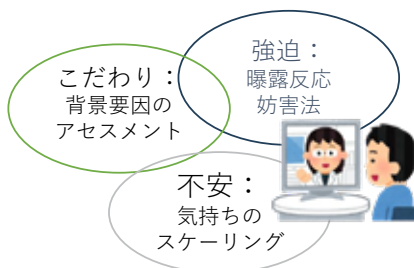
技法の例）曝露反応妨害法

不安や不快感に対して回避が発生すると、その行動が維持される。回避せずに段階的に向き合う方法。

結果と今後に向けて：

オンラインでの心理支援を低年齢に実施したが、行動上の問題や不安の軽減が確認された（右図）。

終了後のインタビューから生活に様々な改善が確認された：「気持ちのスケーリングにより、子どもの不安を関係者と共有できるようになった」「不安でできなかったことができるようになった」



野中・下山,2022

※日本認知・行動療法学会発表段階

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

本研究の背景には、コロナ禍における臨床心理学的研究は未就学児と高齢者を対象とする研究が少ないという過去のレビューがある（野中、2023）。オンライン調査が主流となり、オンラインでのモニター登録者層が少なく、地域とのつながりも薄い対象者は必要な支援の実態すら見えてこない。

こうした孤立しやすい「育てにくさを感じる子供を持つ親子」にアプローチする方法として、オンライン支援は重要である。

本研究は発達障害や強迫症を有する幼少期の子どもに対して、有効性が確認されている心理支援をオンライン環境下で実施しても効果が得られる可能性が一部示唆されたため、知見を活かしたアプリケーションの開発や自治体との連携が望まれる段階にある。

知的財産・論文・学会発表など

- ・衝動性が反復行動に与える影響の解明：強迫スペクトラムの観点から（若手研究：研究代表者）
- ・野中舞子・下山晴彦（2022）幼少期の強迫症状及びこだわりに対するオンライン認知行動療法プログラムの開発と効果の予備的検討 第48回日本認知・行動療法学会
- ・野中舞子（2023）わが国の臨床心理学の研究動向と課題—“コロナ禍”に行われた研究に焦点を当てて—教育心理学年報、62, 91-107

心理

効果的な心理療法と生きがい



文学部 心理学科 教授

長谷川 明弘

HASEGAWA, Akihiro

URL : <https://www.hasegawa-akihiro.com/>



心理

八王子キャンパス

キーワード：短期、効果的、効率的、心理療法、生きがい

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

研究の概要

- 心理療法を可能な限り短期で効果的で効率的な実践を目指すとする**ブリーフサイコセラピー**に注目し、特に**ブリーフセラピー**、**催眠法**、**臨床動作法**を実践している。
- 大半の事例は面接回数が1回から15回程度で区切りとなる
- 生きがい
- セルフケア、健康増進活動（ヘルスプロモーション）、生きがい向上プログラム
- 個人、家族、集団、組織を対象として生涯にわたる発達段階への心理支援
- 実践の特徴
 - ・ 対象は、乳幼児から高齢者まで対応
 - ・ 自治体を通して住民に向けた活動や企業に勤める従業員ならびに家族向けの健康相談事業団体が行う電話相談や面接で支援を行っていた。
- 相談内容は・・・
 - ・ 育児不安、学校適応、進学、学業不振
 - ・ 精神・身体的病気の不安
 - ・ 職場での困り事、近所つきあい
 - ・ 親戚づきあい、人づきあい、自分のこと
 - ・ 発達障害、精神疾患、心身症
 - ・ 夫婦関係、家族関係



などの相談を受けてきた。



Fig. 1: Constituent elements of "ikigai" (Hasegawa, et al., 2001)

"ikigai" can be defined as "a sense of being alive now, an individual's consciousness as a motive to live". "IKIGAI" is not of the mind which integrates a "Gloss of IKIGAI" and "Feeling of IKIGAI".

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

一人ひとりに合わせた心理療法・心理支援を起点として、夫婦や家族、そして組織や地域に向けた支援が展開できます。それらの支援が重なり合うことで、「生きがい」を持って暮らす生活や働きがいのある職場が実現できると思われます。個人・家族に向けた支援や研修・講演、そして組織内外の研修と支援、地域に向けた支援を展開する際に何かお役に立てられれば幸いです。

知的財産・論文・学会発表など

1. 岡本浩一・長谷川明弘（編）2019 パワハラ・トラウマに対する短期心理療法（ブリーフサイコセラピー）－ブリーフセラピー・臨床動作法・NLPの理論と実際、神奈川・春風社。
2. 岡本浩一・小林能成・長谷川明弘（編著）2023 自分を整える短期心理支援法－瞑想法、臨床動作法、NLP、バイオフィードバック、神奈川・春風社。
3. 長谷川明弘 2024 他者と親密な関係を築けないことに悩んでいた女性会社員に対して6回の面接で状態が改善した事例〔第2部事例から学ぶMMPI-3日本版とその展望：6章MMPI-3のみを実施した事例；事例7〕、MMPI-3日本版研究会代表（編者代表：鋤柄増根）MMPI-3日本語版による心理査定－解説と事例・展望－、pp.145-166、京都・三京房

進化・適応論的観点からのヒトの社会性の検討



文学部 心理学科 准教授

堀田 結孝

HORITA, Yutaka

URL : <https://sites.google.com/site/yhoritapage/>**心理**

八王子キャンパス

キーワード：利他性、制度、文化、進化・適応論アプローチ**SDGs 目標 16：平和と公正をすべての人に**

研究の概要

他者と協力し合い、大規模で複雑な関係性から成る社会を形成しているのが、他の種とは異なるヒトの大きな特徴である。特にヒト独自の社会性として、「強い協力性」及び「文化」の役割に注目し、進化心理学的アプローチから研究に取り組んでいる。

参加者同士で相互作用を行う実験室研究、社会調査データの分析、クラウドソーシングを用いた大規模サンプルを対象とした実験及び調査研究を行っている。

利他行動を支える心理メカニズムや制度の解明

- ・ 互恵性や学習などの個人の心理メカニズム (Horita et al., 2017)
- ・ 罰、規範、評判などの制度の役割 (Horita et al., 2016)
- ・ 集団を越えた利他行動の形成に及ぼす要因 (Horita & Hamada, 2024)

文化と心理の相互作用

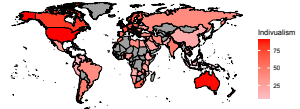
- ・ 社会的ネットワーク、他者への信頼及び文化の関連 (Horita & Yamazaki, 2023)
- ・ 心理傾向の文化差の背後にある社会・環境要因の検討 (Horita & Takezawa, 2018)

進化・適応論からの精神的健康へのアプローチ

- ・ 被害妄想や不安などの適応基盤の検討 (Horita, 2021)



実験室



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

ヒトの協力性の理解は、経営の分野においても組織管理や運営などの面で重要視される。人々がどのような条件のもとで協力するか、どのような制度のもとで協力関係が維持されるかを明らかにすることで、組織成員間あるいは組織を越えた協力関係の形成や生産性の向上などにも応用することが可能となる (堀田, 2019)。

帝京大学で自身が担当する「産業・組織心理学」の科目でも、ヒトの利他性に関するテーマを産業分野のテーマと交えながら学生たちに紹介している。

知的財産・論文・学会発表など

- ・ **Horita, Y.** & Hamada, S. (2024). Revisiting the bounded generalized reciprocity model: Ingroup favoritism and concerns about negative evaluation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 113, 104618.
- ・ **Horita, Y.**, & Yamazaki, M. (2023). Generalized trust rather than perception of relational mobility correlates with nominating close friends in a social network. *Japanese Psychological Research*, <https://doi.org/10.1111/jpr.12451>
- ・ **Horita, Y.** (2021) Conjecturing harmful intent and preemptive strike in paranoia. *Frontiers in Psychology*, 12:726081
- ・ **Horita, Y.**, & Takezawa, M. (2018). Cultural differences in strength of conformity explained through pathogen stress: a statistical test using hierarchical Bayesian estimation. *Frontiers in Psychology*, 9: 1921.
- ・ **Horita, Y.**, Takezawa, M., Inukai, K., Kita, T., & Masuda, N. (2017). Reinforcement learning accounts for moody conditional cooperation behavior: experimental results. *Scientific Reports*, 7:39275
- ・ **Horita, Y.**, Takezawa, M., Kinjo, T., Nakawake, Y., & Masuda, N. (2016). Transient nature of cooperation by pay-it-forward reciprocity. *Scientific Reports*, 6:19471
- ・ 堀田結孝 (2019). 人間の協力行動に関する実験ゲーム研究と組織管理への応用可能性. *組織科学*, 53, 33-42.

大学生に対する発達の観点からの支援



文学部 心理学科 准教授

村上 香奈

MURAKAMI, Kana

URL : https://researchmap.jp/kana_murakami



心理

八王子キャンパス

キーワード：大学生、発達の観点からの支援、ソリューション・フォーカスト・アプローチ

研究の概要

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

多くの大学生にとって、大学は社会に出る前段階であり、進路決定という形で社会への移行を行うための準備期間である。この期間に大学生は大学で何を経験し、何を学習する必要があるのだろうか。

大学生は青年期特有の発達課題や問題に直面し、それらについて悩み考え葛藤することが求められている(Erikson, 1959)。しかし、大学生の様相として主体的な悩みを経験できない傾向(下山, 1997; 村上・山崎, 2008)や、進路決定のプロセスにおいて「停滞」を経験する傾向(山田, 2008; 労働政策研究・研修機構, 2012)が指摘されている。

このような現状を受け、これまでの研究ではソリューション・フォーカスト・アプローチ(SFA)に基づく方法により、大学生に対する発達の観点からの支援として、自身や将来について悩み考える機会を設定し半構造化面接やグループワークによって実践してきた(村上, 2011; 村上・山崎, 2015)。SFAを用いる理由として、自身や将来について考える契機になる、今できていることを評価し成功体験を認識できるようになる、現実的、具体的かつ達成可能な目標の作成が可能となり実際の行動につながりやすいことが挙げられる。

結果として、支援として与えられた考える機会や方法であっても、それが契機となり、自分や将来について考えることができ、将来への志向、行動力の獲得、現実の直面といった変化が得られること、さらに、自身やその将来についての学生同士の意見交換は実際の行動に影響を与えることが示唆された。

現在は授業内で本プログラムを実践し、将来に向けて今、何ができるかを考えさせ、主体的な行動を促している。



Fig. 本プログラムの影響(村上(2011)を改編)

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

本研究で用いた SFA は、自身の将来を展望し、悩み考え行動することによって、自分なりの解決に導くということを援助する。このような経験は、大学生の発達を促進し、ひいては社会の中で生きていく力につながっていくと考えられる。

現在は調査に参加する学生だけでなく、「心理学研究演習」の授業に取り入れ、よく多くの学生に自身や将来について SFA という視点から考える機会を設定している。

知的財産・論文・学会発表など

- ・村上香奈・中村晋(2023). すべての子どもに寄り添う特別支援教育 ミネルヴァ書房
- ・村上香奈・山崎浩一(2021). 子どもを支援する教育の心理学 ミネルヴァ書房
- ・村上香奈・山崎浩一(2008). 将来を見据えた目標設定プログラムの実践と有効性の検討—大学における発達支援の探究—, 武蔵野大学人間関係学部紀要, 第5号, 141-156.
- ・村上香奈(2011). 青年期における発達支援の実践と有効性の検証—女子大学生を対象とした面接調査から—, カウンセリング研究, 44, 38-49.
- ・村上香奈・山崎浩一(2015). ソリューション・フォーカスト・アプローチに基づくグループワーク・プログラムの実践とその影響—大学生への発達支援に関する質的研究—, カウンセリング研究, 48, 218-227.

心理職の職業的発達とコンピテンシー



文学部 心理学科 教授

元永 拓郎

MOTONAGA, Takuro



心理

URL : https://researchmap.jp/motonaga_77

八王子キャンパス

キーワード：コンピテンシー、公認心理師、心理職、職業的発達、臨床心理士

研究の概要

公認心理師や臨床心理士といった心理職は、どのような職業的発達をしていくのだろうか。本研究では、目指すべき心理職像を構成する資質や能力をコンピテンシーとして着目し、実務経験年数によって、どのように獲得していくか、またどのような職業的発達上の課題を有することがあるかを、さまざまな実務経験を有する心理職へのヒアリング調査から明らかにした。

まず、5名の心理職へのヒアリング調査結果の検討から、図1のように、実務経験年数によって、プロフェッショナルイズムの模索、伴漸の実践、コンピテンシー間の相互作用などのテーマが浮かび上がった。

8名の心理職への調査結果からは、図2のように、実務経験年数によって、様々な個別の課題が生じていることが示された。これらの多様性も、職業的発達として重要な視点となる。

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

図1 職業的発達とコンピテンシー

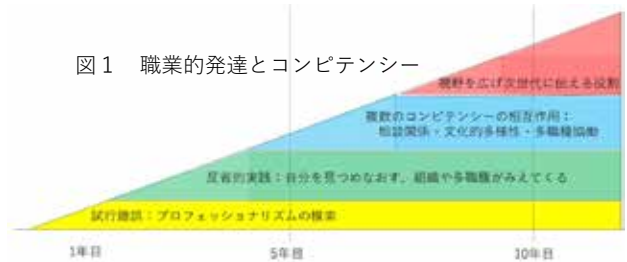
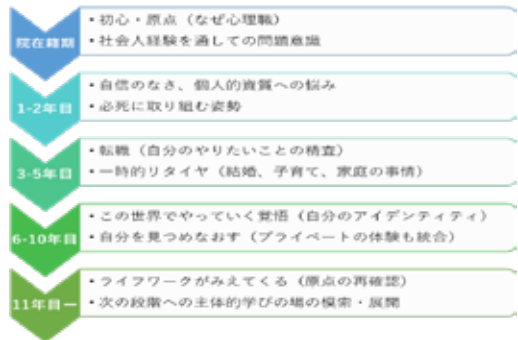


図2 職業的発達と個別課題



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

1988年に誕生した臨床心理士や2019年に登録が開始された公認心理師といった心理職は、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働のどの分野にも存在する心理学に基づく専門性を有する対人支援の専門職である。このような心理職が質の高い支援を行うために、この研究は有意義と考える。社会のどのような分野においても、心理的悩みは発生しうるので、特に国家資格である公認心理師の活用範囲は、今後ますます拡大すると予想される。

知的財産・論文・学会発表など

- 元永拓郎（2024）. 日本における心理専門職養成に求められるコンピテンシー概念. 公認心理師：実践と研究, 3 : 26-33.
- 元永拓郎（2024）. 終わりのなき探究—コンピテンシーは踊る—. 臨床心理学, 増刊 16号.
- 元永拓郎（2023）. 公認心理師の資質向上のための養成機関修了後の生涯研修のための制度. 日本精神科協会雑誌, 42, 48-54.

対人関係と心の健康



文学部 心理学科 講師

森脇 愛子

MORIWAKI, Aiko

心理

八王子キャンパス

キーワード：対人関係、心の健康

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

研究の概要

対人関係は、心の健康と密接なかわりともつと考えられている。たとえば、困ったときに周囲の身近な人に助けをもらい、安心することもあるだろう。また、悩み事があったり、落ち込んだりしている時に、周りの人に打ち明けて、慰めてもらい、気分が回復するなど、経験されることも多い。一方で、周囲の人との誤解が生じ、悲しい気持ちになる、挨拶をしたのに、あいさつがかえってこず、不安な気持ちになる、周囲の人との間で軋轢であり、やきもきする、など対人ストレス（例：摩擦）が生じるといったネガティブな体験につながることもある。そして、そのような対人関係上のさまざまな体験と、心理的健康・感情状態との関連や、ネガティブ感情への対処の仕方やネガティブ感情のメタ認知についてなどを、中心テーマとして扱っている。

SNS などのツールでのコミュニケーションが活発化し、積極的な利用へ

近年、積極的に用いられるようになってきた SNS は、便利な一方で、トラブルや悩みのたねになることもある。たとえば、受け取ったメッセージに対して、早く返信しなくては、と不安になったり、相手の既読無視に心を痛めたり、怒りなどの感情の勢いにまかせて送信したあとで、とても後悔してしまうなどさまざまな体験をしたりする。SNS 上での行動には、パーソナリティや心の健康状態、日ごろの対人関係の在り方がどのようにかわっていくのかを中心に検討している。方法としては、青年期の人たちを対象とした質的・量的調査を実施している。

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

- ・心の健康面を考慮した情報リテラシーなどへの基礎資料につながればと考えている。
- ・将来的には、心の健康状態を高めたり維持したりするための心理教育等につながる知見が得られればと考えている。

知的財産・論文・学会発表など

- ・森脇愛子・坂本真士 編著 (2015) 対人的かわりからみた心の健康 北樹出版
- ・森脇愛子 2022 (3 月) 大学生における携帯電話への依存と孤独恐怖との関連 帝京大学文学部心理学紀要第 26 号, 29-35.

ヒトの自己認識に関わる認知神経基盤の検討



文学部 心理学科 講師

矢追 健

YAOI, Ken

URL : https://researchmap.jp/ken_yaoi



心理

八王子キャンパス

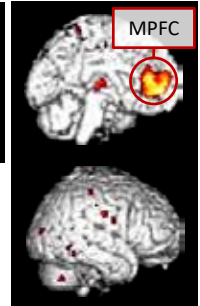
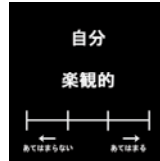
キーワード：自己認識、脳イメージング、自閉スペクトラム症

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

研究の概要

我々は普段の生活において、「自分」が「自分」であることに對して疑いを抱くことはほとんどない。しかし、こうした「自己認識」はある種の精神疾患や脳損傷などによって失われたり、混乱したりしてしまうことがあることが知られており、あくまでも我々のこころや脳のはたらきによって支えられている認知機能のひとつであると言える。

それでは、我々の自己はどのような認知的・神経基盤によって成立しているのだろうか？自己認識には身体感覚や知覚のレベルから内的な表象のレベルに至るまで、多様な認知的・神経基盤が関わっていると考えられるが、例えば「自分について考える」必要があるような自己参照課題を行っている場合と、他者について考える他者参照課題を行っている場合の神経活動をfMRI（機能的磁気共鳴画像法）によって比較すると、自己参照課題において前頭前野内側部（MPFC）と呼ばれる領域の活動がより高いことが示唆された（右図）。MPFCは内的表象との関係が示唆されている領域であり、自己表象が他者よりも情報量が豊かで統合度がより高いことと関係していると考えられる。しかし、MPFCは自己表象のみならず他者も含めた表象や社会性との関係も示唆されており、「この領域に自己のみが存在する」というわけではないことには注意が必要である。



(Yaoi et al., 2015)



また近年は、特に他者との社会的関係性の形成に困難を抱える自閉スペクトラム症（ASD）児を対象に、自己認識や社会性に関わる脳領域における神経活動についての発達の研究にも取り組んでいる。ASD児には自己認識の機能に定型発達児とは異なる特性があり、それが社会性の障害のひとつの要因となっている可能性が近年指摘されつつある。こうした特性について明らかにすることができれば、ASDの早期診断や個別の療育に対して有益な示唆が得られる可能性がある。

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

「自己とは何か」という問いは古くから哲学や心理学の分野において取り上げられてきた、ヒトの根源的な疑問のひとつである。我々の自己認識の認知的・神経メカニズムを明らかにすることができれば、例えば人工知能（AI）は自我を持ちうるのか（AIに自我を持たせるためには何が必要か）といった問題を解決するための糸口となるだろう。また、自己認識におけるASD児特有の脳神経活動を同定することができれば、これまで医師や両親の主観に依るところが大きかったASDの診断について、脳神経活動の測定による客観的な診断根拠が得られる可能性が考えられる。

知的財産・論文・学会発表など

- Yaoi, K. Osaka, N., & Osaka, M. (2013). Medial prefrontal cortex dissociation between self and others in a referential task: An fMRI study. *Journal of Physiology Paris*, 107, 517-525.
- Yaoi, K. Osaka, N., & Osaka, M. (2015). Neural correlates of the self-reference effect: evidence from evaluation and recognition processes. *Frontiers in Human Neuroscience*, 9, 383.
- 矢追健・学版直行 (2018). 自己と脳. 生理心理学と精神生理学 第III巻 展開. 北大路書房, pp.53-64.

心理

朝鮮学校の現状に即した学校保健活動の検討 一心のケア活動に注目してー



文学部 心理学科 講師

尹 成秀

YUN, Seongsu

URL : https://researchmap.jp/y_s_s



心理

八王子キャンパス

キーワード：多文化間心理学、外国人学校、在日コリアン、精神分析的心理療法

SDGs 目標 3：すべての人に健康と福祉を
SDGs 目標 10：人や国の不平等をなくそう

研究の概要

今日、学校教育現場では外国にルーツを持つ子どもの支援が喫緊の課題となっており（文部科学省、2020）、その一つに「外国人学校」の学校保健の問題が注目されている。「外国人学校」とは、文部科学省が「専ら外国人の子供の教育を目的としている施設」として位置づけている学校であり、朝鮮学校、ブラジル学校、インターナショナルスクールなどが含まれる。「外国人学校」の多くは各種学校もしくはは無認可であるため、これまで学校保健安全法の対象外として扱われてきた。これまで「外国人学校」の学校保健活動に関する実証的な研究はほとんど行われていないのが現状である。

本研究では外国人学校の中でも、朝鮮学校に注目する。朝鮮学校では 2022 年現在、全国 61 校のうち、保健室を設置し、継続的な活動を行っている学校は 2 割以下となっている（在日本朝鮮人中央学校保健委員会、2022）。朝鮮学校の児童生徒の場合、ヘイトス ピーチに代表される社会問題等によって、ストレスフルな状況に陥りやすく、学校保健活動の中でもとりわけ心のケア活動への高いニーズが推測される。

本研究は、朝鮮学校の現状に即した学校保健活動において、心のケア活動の取り組みを促進するための支援モデルを構築することを目的とする。そのために、調査研究を通じて、朝鮮学校における j 学校保健活動と心のケア活動の実態を明らかにし、それらが朝鮮学校の児童生徒ならびに教職員に及ぼす効果について検討する。そして、申請者が朝鮮学校に赴き、現場の養護教諭と連携して保健室経営に参加する中で、心のケア活動を実施し事例研究を行い、調査研究の知見と合わせて支援モデルを構築する。

本研究は科研費 23K12642 の助成を受けている。



図 学校での活動

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

研究の学術的独自性と創造性は、差別などの社会的問題にまつわる心の傷つきや葛藤を語り難いことが予測される朝鮮学校の児童生徒に対して、身体と心の両方を扱う保健室が、心のケアを求める際の駆け込み寺として機能し、心のケア活動を展開していける可能性について探究していく点にある。また、心理専門職として教育現場の心理支援に従事してきた申請者が、保健室を設置する朝鮮学校に継続的に入り、朝鮮学校の教員との協働、外部多職種専門家との連携のもと、保健室活動と心のケア活動に携わる中で、制度上の課題について言及するだけでなく、実際の支援に役立つ知見や工夫を見出せることが期待される。

知的財産・論文・学会発表など

- ・尹 成秀 (2016). 在日コリアン青年の対人関係における体験－グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた在日コリアン青年の語りの分析－ 教育心理学研究, 63 (4), 492-504.
- ・尹 成秀 (2023). 第 7 章 多文化を生きる子どもを知る 村上香奈・中村 晋 (編)すべての子どもに寄り添う特別支援教育 ミネルヴァ書房
- ・尹 成秀 (2023). マイノリティ差別と生々しさ 日本精神分析学会第 69 回大会
- ・尹 成秀 (2024). 同胞心理職の視点から見た朝鮮学校での心のケア活動の特徴 第 47 回医協学術報告会

音列処理の比較研究



文学部 心理学科 准教授

脇田 真清

WAKITA, Masumi



心理

URL : https://researchmap.jp/wakita_85297351

八王子キャンパス

キーワード：ブローカ野、階層、チャンク、言語、音楽、行為、比較

SDGs 目標 4：質の高い教育をみんなに

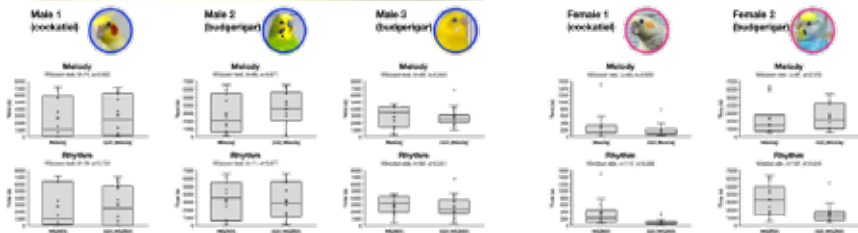
研究の概要

トリの中には、歌を学ぶ種がいます。トリの歌とヒトの言語とは共通点があります。そのため、トリの歌知覚や発声を通してヒトの言語学習の基本的な仕組みを解明し、将来的に発話や言語に関する治療法の開発に役立てることが期待できます。

トリの歌とヒトの言語との類似点

- ① 音の模倣と練習による学習：トリも音を聞き、その音を再現するための練習を繰り返します。この模倣学習のメカニズムを知ること、言語発達に必要な脳の仕組みが理解しやすくなります。
- ② 発話のタイミングやリズムの制御：トリの歌には一定のリズムやタイミングがあり、ヒトの会話や発話のリズムと似た特徴があります。このリズムの構造を分析することで、言語リズムの役割や、リズムが発話に与える影響について研究できます。
- ③ 発話の神経メカニズム：トリの歌を制御する脳の部位は、ヒトの発話を司る脳の領域と共通点があります。トリの脳内でどのように情報が処理され、発声に繋がるかを調べることで、ヒトの発話メカニズムや言語障害の理解に貢献できます。

- ④ オウム科のトリでの脳の性差：求愛行動や縄張り確保のために歌を歌うオスでは、発声制御に関わる脳領域（ヒト線条体、ブローカ野の相同部位）が発達しています。一方、歌を学習しない代わりに、オスの歌に敏感で、求愛やコミュニケーションにおいて歌によってパートナーの質を評価するメスでは、発声に関わる脳領域は未発達です。これまでに、メスはリズムに選好をもつことを明らかにしました。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

これまでに、ブローカ野ではドメイン間で時系列の規則性を処理する神経基盤が共有されること実証してきました。このことは、音楽学習による単語習得のレベル以上の転移効果があることが期待でき、本研究の言語教育への展開が期待できます。また、ブローカ野のリズム・タイミング制御の観点から、運動障害後のリハビリテーションへの音楽療法の効果へのエビデンスを提供できると考えられます。

知的財産・論文・学会発表など

- Wakita, M. (2024). Auditory sequence preference in cockatiel. *Int J Psychol* 59, (Suppl 1), 304.
- Wakita, M. (2020b). Language Evolution from a Perspective of Broca's Area. In N. Masataka (Ed.), *The Origins of Language Revisited* (pp.97-113). Springer, Singapore.
- Wakita, M. (2020a). Common marmosets (*Callithrix jacchus*) cannot recognize... *Behav Process* 176, 104-136.
- Wakita, M. (2019). Auditory sequence perception in common marmosets... *Behav Process* 162, 55-63.
- Wakita, M. (2016). Interaction between Perceived Action and Music Sequences... *Front Hum Neurosci* 10, 656.

心理試験と生成 AI を用いた 風評発生に関する分析



医療技術学部 診療放射線学科 教授

大谷 浩樹

OHTANI, Hiroki



心理

URL : <https://www.e-campus.gr.jp/staffinfo/public/staff/detail/3106/35>

板橋キャンパス

キーワード：放射能心理、心理試験、リスコミ、生成 AI、風評

SDGs 目標 10：人や国の不平等をなくそう

SDGs 目標 16：平和と公正をすべての人に

研究の概要

環境放射能による風評被害は科学的に現状を理解するだけではなく放射能心理の観点から対応する必要がある。本研究の目的は処理水の海洋放出および花の栽培に関する風評の発生を分析し、リスクコミュニケーションの一助とすることである。

心理試験として色彩と形の印象から人々の感情を分析し、生成 AI の回答から得られる情報を検討する方法を用いた。研究対象者を 4 グループに分け、①海産物を販売する画像、②処理水の海洋放出に反対する画像、③花の栽培画像、④汚染土壌再利用画像をそれぞれ観察させた。観察の前後においてプルチックの感情の輪を用いて色彩の心理試験を行った。また、色を塗る作業において○△□の形を選択し、その理由をアンケート調査にて明確にした。



Photo.1 処理水放出反対



Photo.2 花の栽培

漁業関係において何が問題ですか？

- | | |
|------------------------|--------|
| 1 科学的根拠が信じられない | → 40 % |
| 2 漁業関係者から風評被害があると知っている | → 20 % |
| 3 国の言うことと漁業関係者の主張の相違 | → 40 % |
| 4 現実味が無い | → 0 % |

花業関係において何が問題ですか？

- | | |
|------------------------|--------|
| 1 放射能濃度と除染が信じられない | → 20 % |
| 2 花業関係者から風評被害がないと知っている | → 60 % |
| 3 国の言うことと花業関係者の主張の同一 | → 20 % |
| 4 現実味が無い | → 0 % |



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

放射能に対する不安は科学的・理論的に対応しても払拭されない特徴があり、放射能心理学の確立が実学としての急務である。放射能風評発生を分析を心理試験と生成 AI を用いて行うことは放射能不安の解消となる。これは放射能に関する有識者だけではなく、心理学者、社会学者など多岐にわたる協力体制が必要である。この放射能心理学によってリスクコミュニケーションを構成し、一般公衆に対応することによって社会的な貢献は大きなものとなる。

知的財産・論文・学会発表など

- 環境放射線に対する不安の分類。第 13 回環境放射能除染研究発表会, 2024 年
- 放射能の風評に対する内省的実践の概念。日本保健物理学会第 56 回研究発表会, 2023 年
- The concept of the radiation psychology for radiation medical. The 14th International Symposium on Medical Imaging and Radiology, 2019 年

自我理想型人格および超自我型人格の精神的健康と人格形成：志向性、べきの専制、同一視の観点から



帝京大学短期大学 人間文化学科 講師

茂垣 まどか MOGAKI, Madoka



心理

URL : <https://www3.med.teikyoku-u.ac.jp/profile/ja.7d21b53f0d22bbb7.html>

八王子キャンパス

キーワード：青年、アイデンティティ、べきの専制、自我理想、伝記研究、親子関係

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

研究の概要

人生の模索の時期にいる青年を対象に、アイデンティティ形成にまつわる夢や将来展望の有無や、「べきの専制」に縛られる／縛られない心性について研究しています。具体的には、「～のようになりたい」という“志向性”と“～すべき”という“べきの専制”の観点から人格の様相を検討し、特に自我理想型人格（志向性高・べき低）および超自我型人格（志向性高・べき高）の精神的健康やその形成についてアプローチしています。

同じように「～しよう」という将来展望・方向性を有する青年のうち、主体的かつ柔軟に志向性を発揮する「自我理想型人格」はべきの専制にとらわれる「超自我型人格」よりも精神的に健康であり（図）、幼少期を回顧した際、家庭の雰囲気にあたかいたと認識し、言うことをきかなければならない雰囲気と感じていなかった場合、初期の人格発達の健全な成長が促進され、現在の志向性が促進されべきの専制が抑制されていました。また生涯の人格発達を心理力動的に分析するために伝記分析も行い、幼少期の家庭の雰囲気や親子関係が子どもの同一視やアイデンティティ形成に影響を及ぼす可能性を示しています。今後さらに質問紙調査や面接調査、伝記研究など質的・量的研究を通して、自我理想型人格・超自我型人格の形成について研究をすすめます。

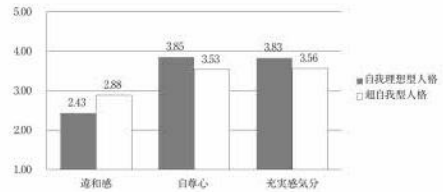


図4-6 自我理想型人格・超自我型人格における道徳感・自尊心・充実感気分の平均値（茂垣（2005）より一部抜粋して作成）

注）自我理想型人格：志向性得点高・べきの専制得点低群
超自我型人格：志向性得点高・べきの専制得点高群 茂垣(2017)より転載

実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

青年がどのように夢を持つのか、それを実現可能なものとするために、いかに挫折にも負けずまい進するのか。あるいはなぜ「～したい」と思うことができないのか。本研究は人格発達の基礎的研究であり、社会人としての業務等に直接役立つものではありません。しかし、生涯発達の観点から、人はなぜ志向性を持つことができるのか、また一見方向性が定まっているように見えるが「～すべき」という思いにとらわれて柔軟になることができず、挫折などに精神的に弱い人があるのはなぜか、などを探求するものです。青年の健やかな精神的発達、この世の中の後をけん引すると考えています。

知的財産・論文・学会発表など

【著書 分担執筆】

- ・大野久・三好昭子・茂垣まどか・赤木真弓（2023）アイデンティティ研究のための伝記分析 生涯発達の質的心理学 福村出版
- ・茂垣まどか（2017）第4章 自己意識の形成 pp.46-62（高坂康雅・池田幸恭・三好昭子 2017 レクチャー 青年心理学—学んでほしい・教えてほしい青年心理学の15のテーマ 風間書房）
- ・茂垣まどか（2013）V-1 アイデンティティの模索と確立、V-2 青年期の時間的展望、V-3 社会に出るための模索、VI-1 仕事に就くこと・仕事のやりがい pp.114-125, 132-135.（岡本祐子・深瀬裕子編著 2013 エピソードでつむむ生涯発達心理学 京都：ミネルヴァ書房）

【学術論文】

- ・茂垣まどか（2020）同一視形成の形成要因についての伝記資料による比較分析：ミヒャエル・エンデとエーリヒ・ケストナーの伝記資料を用いて 教職研究（立教大学 学校・社会教育講座教職課程 紀要）34, 33-44.
- ・茂垣まどか（2014）志向性とべきの専制の形成要因の検討：幼少期の家庭の雰囲気と自我発達の様相から 立教大学心理学研究, 56, 11-22.
- ・茂垣まどか（2005）青年の自我理想型人格と超自我型人格の精神的健康：志向性とべきの専制の様相の観点から、教育心理学研究, 53 (3), 344-355.

アスリートの心理サポート方略の検討



スポーツ医科学センター 助教

松永 悠希

MATSUNAGA, Yuki



心理

URL : <https://www3.med.teikyo-u.ac.jp/profile/ja.5669f2d3d3dbbdea1.html>

八王子キャンパス

キーワード：スポーツ心理学、スポーツ傷害受容、アスリート、リハビリ

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

研究の概要

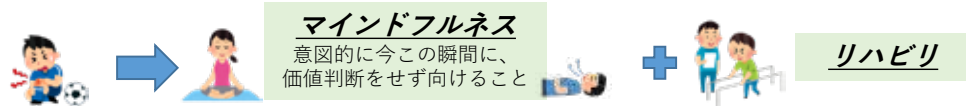
【アスリートと心理サポート】

アスリートがより高いパフォーマンスを発揮するためには、身体・心理的側面についても強化が必要である(荒木, 2019)。彼らの心理的なプレッシャーは大きく、心理的要因によって結果も左右される(荒木, 2019)。近年では、メンタルトレーニングを取り入れるアスリートも多くなる。近年、**マインドフルネス**「意図的に今この瞬間に、価値判断をせず注意を向けること」(Kabat-Zinn, 1994)という心理的特性・介入方法がスポーツ界においても注目を集めており、パフォーマンス向上の方略として取り入れている選手もいる。その効果には**ストレス低減、精神健康へ影響、心理的疲労**の改善などがある(例えば 雨宮, 2014; 入江, 2018; Pidgeon et al., 2014; 大平, 2015 など)。

【アスリートと怪我】

アスリートにとってスポーツ傷害も心理的に大きな影響を与える要因となり、時には選手生命をも揺るがす重大な問題である。アスリートが競技復帰のために行うリハビリは、怪我の回復において重要な役割を担っており(Arvinen-Barrow and Granquist, 2020)、リハビリへの専心性はスポーツ傷害に対する受容に関連している。このことから、受傷アスリートへの傷害受容に対するサポートが重要である可能性が考えられる。

受傷アスリートへの心理サポートとして目標設定やソーシャルサポートなどを取り入れることが多いが、マインドフルネスも受傷アスリートにとって有効であることが示唆されている(Mohammed et al., 2018)。しかしながら、国内外においてこの分野での研究は少なく、さらに検証が必要である。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

競技をする上で心理面の重要性が広く認識されるようになり、メンタルトレーニングを自分で取り入れるアスリートは増えている。本学のみならず、さまざまな大学や企業がスポーツに力を入れており、医科学的サポートを行なっているが、心理面でのサポートを本格的に取り入れているところはまだ少ない。受傷アスリートへの心理サポートの重要性がより明確にすることは、受傷アスリートが安心・安全に競技に復帰し活躍することにより大きく貢献すると期待される。またこのことは、怪我なく取り組んでいるアスリートを含むチーム全体への心理サポート導入促進につながると予想される。

知的財産・論文・学会発表など

- ・受傷アスリートの心理特性及び心理尺度の適正の検討, 東京体育学会第 14 回学会大会
- ・Differences in trait mindfulness of female university athletes based on their Experiences of time-loss due to sports injuries, the FEPSAC congress 2024
- ・大学生アスリートの長期離脱経験とマインドフルネス特性の関係性の検討, 日本体育・スポーツ・健康学会第 74 回大会
- ・大学生受傷アスリートのマインドフルネス特性は傷害受容と関連しているのか, 日本スポーツ心理学第 51 回大会

大学附属心理相談施設におけるがん患者・家族の 心理社会的支援のあり方



心理臨床センター 助手

佐藤 稔子

SATO, Toshiko



心理

URL : <https://researchmap.jp/2024>

八王子キャンパス

キーワード：臨床心理学、医療心理学、最古オンコロジー

SDGs 目標3：すべての人に健康と福祉を

SDGs 目標4：質の高い教育をみんなに

研究の概要

世界保健機関（1990）や日本における第4期がん対策推進基本計画（2023）では、がん患者及びその家族等の療養におけるQOLの向上を目指している。がん患者と家族は多様なニーズを抱え、これがQOLに影響を与えるため、家族のニーズを満たすことが重要とされている。がん患者だけでなく、がん患者家族においても、生活の場において、がん治療と仕事の両立が難しいと感じている。がん医療においても質の高い支援を実現するために、患者・市民参画が求められている。生活の場における、心理社会的支援は、大学附属心理相談施設が地域に心理臨床の専門的な知識を提供する役割があるしかし、患者家族の心理社会的支援において地域を繋ぐ役割をとった研究や報告はいままでにない。

本研究は、大学附属心理相談施設における地域架橋的ながん患者家族の心理社会的支援のあり方を検討することを目的とする。さらに、地域においてがん患者家族が相談しやすくなる環境づくりに寄与するとともに、療養QOL向上につながることを期待できる。

質の高い切れ目のない支援のために



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

がん患者さんやご家族は、治療前から「これからどうなるのか」という不安を感じており、治療後に病院を離れてからも病気のことを考えてしまいます。がん患者さんやご家族が、地域で安心して生活できるように、医療機関外の地域の場における心理社会的支援を提供する場として大学附属心理相談施設における地域架橋型のがん患者家族等の心理社会的支援のあり方を検討したい。本研究の将来的展望として、患者家族等が相談しやすくなる環境づくりに寄与し、患者家族等の地域における心理社会的支援へのアクセスが向上することで、患者家族等のQOLが向上し、相互関係にある患者本人のQOLの向上が期待される。

知的財産・論文・学会発表など

- Sato T, Seto M, Sangai T, Norihiko S, Nishimiya H, Kikuchi M, Shimizu A, Iwamitsu Y. The effectiveness of pretreatment video-based psychoeducation for patients with breast cancer. Palliat Support Care. 21, 1016-1023. 2023
- 鹿内裕恵, 佐藤稔子, 城戸口親史, 北里美和, 杉田隆大, 岩満優美. 関節リウマチ患者における不安と抑うつとその関連要因の検討. こころの健康. 35 (1), 72-78, 2020.
- 青木正平, 小坂倫賢, 仙石紀彦, 菊池真理子, 佐藤稔子, 藏並勝, 白井教子, 田久保美千代, 井上勝夫, 岩満優美. 心理的ストレスの軽減に向けたヨガと心理教育の組み合わせの試み. 北里医学. 48: 105-112. 2018.

心の起源を探る



先端総合研究機構 複雑系認知研究部門 教授

岡ノ谷 一夫 OKANOYA, Kazuo

URL : <https://okanoyalab.hp.peraichi.com/jp>



心理

板橋キャンパス

キーワード：心、言葉、音楽、脳、感覚運動ニューロン、コミュニケーション

SDGs 目標 4：質の高い教育をみんなに
SDGs 目標 16：平和と公正をすべての人に

研究の概要

自分に心があることがわかるのは、自分しかない。しかし心は、自分の行動に深くかかわっている。だから、心も進化の過程で発生してきたものだと考えられる。私たちは、小鳥のさえずりの学習過程、げっ歯類の情動発声、ヒトの音楽などを対象として、コミュニケーションにかかわる心のはたらきとそれと関連する神経活動を調べている。鳥がさえずりをうたうとき、うたっている鳥の脳内でも、聴いている鳥の脳内でも、一部の神経細胞に遺伝子が発現する（写真左）。さらにいくつかは、うたっているときと聴いているとき、どちらでも活動する感覚運動ニューロンである。こうした神経細胞が、他者の行動を理解するのに役立つのであろう。ラットは嬉しいとき 50kHz の、悲しいとき 22kHz の鳴き声を出す。これを聴いているラットも、同様な感情を経験することを、私たちは行動学的に示した（写真中央）。これも他者の感情を自己の感情に変換する感覚運動ニューロンの機能であろう。同様なことが、ヒトが音楽を演奏し鑑賞する過程でも起こっているはずである（写真右）。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

私たちが進めているのは、心の起源を探る基礎研究である。しかしその過程で、コミュニケーション障害や学習障害、運動障害がなぜ起こるのかについての知見を得ることができるはずだ。脳と行動がどう関連し、コミュニケーションを可能にしているのかを知ることは、人類の進化と存続についての洞察につながるであろう。

知的財産・論文・学会発表など

・著書

岡ノ谷一夫. 私の心と動物の心. 帝京大学先端総合研究機構（編集）, 未来を拓く「自分流」研究（pp.130-147）. 東京：帝京大学出版会, 2023.

・論文

Yuki, S., Nakatani, H., Tachibana, R. O., & Okanoya, K. (2024). Effective modulation from the ventral medial to the dorsal medial portion of the prefrontal cortex in memory confidence-based behavioral control. *Sci Rep*, 14 (1), 10141. 岡ノ谷一夫. (2023). 音声コミュニケーションと脳の進化. *Clinical Neuroscience*, 41 (12), 1594-1598.

対面コミュニケーションによる 学習を支える神経基盤



先端総合研究機構 複雑系認知研究部門 講師
柳原 真 YANAGIHARA, Shin



心理

URL : <https://www3.med.teikyo-u.ac.jp/profile/ja.8c0836e4c260711b.html>

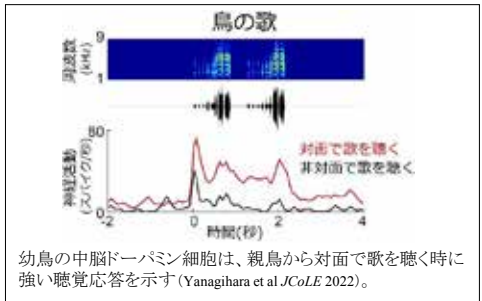
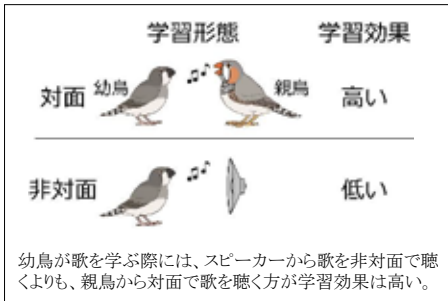
板橋キャンパス

キーワード：対面コミュニケーション、学習、記憶、臨界期、発声、小鳥、ドーパミン

SDGs 目標 4：質の高い教育をみんなに

研究の概要

ヒトの乳幼児が言葉を学ぶ際には、周りの大人が話しかける言葉を直接聴く対面コミュニケーションが重要であり、同じ言葉をビデオやスピーカーを通して受動的に聴いても高い学習効果は得られない。学習臨界期に親鳥から歌を学ぶ小鳥においても同様の現象が知られている。キンカチョウの幼鳥はスピーカーから提示された歌を受動的に聴いた場合に比べ、親鳥から対面場面で歌を聴いた方がその歌をよく学ぶ。全く同じ音声を聴いた場合でも、学習者（幼鳥）が教示者（親鳥）から対面で音声聴いた方が学習効果は高い。このように、動物種の違いによらず対面コミュニケーションの重要性が行動レベルで明らかになっているが、これを支える脳のしくみはほとんど分かっていない。臨界期における対面コミュニケーションは、学習者の脳にどのような生理学的・解剖学的な違いを生み出し、学習促進につながるのか。本研究では、学習中における幼鳥の脳内で生じる可塑的变化を分子・細胞・神経回路レベルで明らかにし、対面コミュニケーションに基づく「社会学習」に共通する神経基盤の理解を目指す。



実学へのつながり・産業界へのアピールポイントなど

対面コミュニケーションが学習を促進する脳のしくみの理解が進むことで、脳の特性に基づく効果的な教育・学習方法の開発につながることが期待できる。

知的財産・論文・学会発表など

- Yanagihara, S., Ikebuchi, M., Mori, C., Tachibana, R., & Okanoya, K. Role of midbrain dopaminergic system in social enhancement of vocal learning in songbird. *Proceedings of the Joint Conference on Language Evolution (JCoLE)*, 788-790 (2022).
- Yanagihara, S., Ikebuchi, M., Mori, C., Tachibana, R., & Okanoya, K. Neural correlates of vocal initiation in the VTA/SNc of juvenile male zebra finches *Scientific Reports* 11 (1) 22338 (2021)
- Yanagihara, S., Ikebuchi, M., Mori, C., Tachibana, R., & Okanoya, K. Arousal state-dependent alterations in neural activity in the zebra finch VTA/SNc *Frontiers in Neuroscience* 14: 897 (2020)
- Yanagihara, S. and Yazaki-Sugiyama, Y. Social interaction with a tutor modulates responsiveness of specific auditory neurons in juvenile zebra finches. *Behavioral Processes* 163: 32-36 (2019)
- Yanagihara, S. and Yazaki-Sugiyama, Y. Auditory experience-dependent cortical circuit shaping for memory formation in bird song learning. *Nature Communications* 7: 11946 (2016)